

【熊本S. J. C. D. 例会 抄録】

演 題 若年者の顎関節症に対するアプローチ
演者名 森永博臣
日 付 2009年2月24日

keywords

1. 生活習慣
2. 症状
3. 徴候

抄 録

顎咬合系に不調和が存在する場合には、関連する筋に過緊張が生じたり、顎関節にメカニカルストレスが集中し、その結果として通常それらの筋や顎関節に圧痛あるいは機能運動時の痛みや自発痛が発現する。このような筋や顎関節の症状は複合的な産物であるため筋、顎関節、咬合それぞれ単独の症状や徴候のみによって顎口腔系の病態を的確に把握することは困難であるので、これらの診査結果に基づいて総合的に評価することが重要である。また総合的な診断が確定するまで、非可逆的な治療はすべきではない。

今回の症例の患者さんは 20 歳の女性。1 年 5 ヶ月前に、右顎関節の緩み、それに伴う摂食障害を主訴で来院され、スプリント療法で症状が改善したが、半年ぐらい前からクリックが起こり、症状が前より悪化した患者様の症例です。今回新たに資料を収集し、診断、治療計画を立案しました。皆様のご意見よろしく申し上げます。